

氏名	ムラカミノリコ 村上紀子
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第377号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉身体化される描画の個人性－描画活動の人間形成的意義を考える ために－ 〈作品〉Life -cute bear- Life -sweet cake-
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 准教授（美術学部） 小松佳代子
（論文第1副査）	〃 名誉教授 上野浩道
（作品第1副査）	〃 教授（美術学部） 木津文哉
（副査）	〃 〃（〃） 本郷寛
（〃）	〃 准教授（〃） 齋藤典彦
（〃）	東京大学 教授 岡田猛

（論文内容の要旨）

本論文の目的および研究背景

本論文は、青年期に獲得される描画の個人性が、どのように身体に形成されていくのかを明らかにすることにより、描画活動の人間形成的意義を考察するものである。19世紀末、子どもの絵を対象とした分析がはじまる。文化や人種を超えて描画に観察される表現の特徴から、描画の「発達段階論」が確立された。描画の発達は、幼児期には始まり青年期に最終段階に至る。そして、青年期になると描画の個人性が描画表現に繰り返し産出されるようになる。描画活動は、人間の表現行為の一つであり、古代から今日まで継続されている。それは、人間の身体に描画機能が普遍的に備わっていることを意味している。一方、描画素材および道具は人間により改良され変化してきた。手に直接触れる描画道具の変化は人間の身体性に影響を与え、描画機能を変化させる。描画素材や道具を初めて握る幼児期には、描線を産出する手を制御することができないが、青年期には、道具を握る手が自動化して描線を差出できるようになると考えられる。本論文は、幼児期から青年期にかけて発達を続け、青年期に完成へと至る描画の個人性がどのように人間に形成され保持されるのかを捉えることにより、今日の人間の描画活動の意義を探ることを目的とする。

研究方法

これまでの研究において、幼児期から青年期に至る描画の「発達段階論」は、発達心理学的な見地から描画活動を理論化している。このような描画研究の手法は、人間の発達時期ごとの描画結果に着目したものであり、描画を産出している人間の身体の発達に焦点を当てて考察しているものではない。そのため、描画の「発達段階論」では、描画に発達的变化がみられる青年期までを研究対象としている。しかし、描画機能が老年期に至るまで人間に備わっている事実があることに目を向ければ、描画の個人性が獲得される青年期以降の描画活動についても視野に入れて考察する必要がある。また、描画活動と人間の身体との関係を探るには描画道具や社会文化と描画の個人性との相互関係を捉える観点が必要不可欠である。本論文は、描画の個人性の形成と作動原理を考察した上で、描画活動の意義を人間形成の観点から論じたものである。

本論文の構成

第1章では、まず、心理学などで論じられてきた描画の発達段階論に依拠し、さらに生理学、脳科学、動物学を援用しながら身体および思考の発達という観点から人間の幼児期における描画機能の発達について考察した。人間特有の手の機能性、幼児期における手と目の協応関係、そして、描線の発達とことばの獲得と思考との関連について述べた。人間の手は、優れた巧緻性を備えており、そのため、描画道具を巧く使いこなすことができる。そして、手と目が協応して作動することにより、手の動きは制御されるようになる。さらに、ことばを獲得することにより、描線に命名する活動が発現する。幼児は、思考が発達するのに伴い、描線の形態から意味がわかるようなシンボルを産出できるようになる。幼児期にみられる描線の変化を、身体および思考の発達との関係から考察し、どのように描画機能が身体に形成されていくのかについて述べた。

第2章では、描画活動が、描画技能、知識、道具などの所有により、社会文化的に価値づけがなされていくという側面について、フランスの社会学者であるピエール・ブルデューの社会学における「文化資本」概念を援用して考察した。描画機能の身体への形成は、幼児期は家庭においてはじまるため、描画機会の有無に差がある。一方、教育機関では、誰もが均等に描画機会を得ることにより、描画機能を身体に形成することができる。教育機関以降になると、一部の人々だけが、趣味として描画活動を継続する。そこで、青年期以降の描画活動の場として参加者数の多いカルチャーセンターとコミックマーケットを取り上げ、コミュニティの文化的特性や参加者層の差異について検討した。その結果、趣味的描画機会の場には、さまざまな世代が集い共に活動しており、「社会的アイデンティティ」を得ていることが見てとれた。描画活動が青年期以降にも継続される背景には、ブルデューのいう「ハビトゥス」という慣習行動を生み出すシステムが介在している。このように、青年期に獲得される描画の個人性は、身体において生得的であるというよりも、家庭での描画経験を経て社会および文化の影響を受けて人間に備わることを明らかにした。

第3章では、描画の個人性が、青年期以降も継続して人間に存続する意義について考察した。まず、横断的手法による描画実験の結果から、描画表現にみられる特徴的な傾向を把握し、描画の個人性が青年期以降も継続して産出されることを見出した。つぎに、人間の身体における描画機能の形成作用について、オートポイエーシス理論を援用して考察し、描画の個人性が産出される仕組みと自己との関係性について述べた。描画活動時の身体は、内的な作用である内観と外的な作用である描画道具を操作する感覚とを統合して描線を産出する。そのとき身体に生成される内外の感覚の統合および調整は、描画経験を積み重ねることにより「自動化」される。その結果、リズムカルに産出された描線群からなる表現のなかに描画の個人性を繰り返しみることが可能となる。描線を産出する描画機能の仕組みが「自己内作動」することにより、その都度、自己が形成される。

本論文は、人間に特有の描画活動において、描画機能の形成と作動より描画の個人性がどのように身体化されていくかその原理を明らかにした。人間は、手の巧緻性の獲得と描画経験の積み重ねから、描画道具を使いこなし、リズムカルに描線を産出できるようになる。描画活動は、身体感覚を生み出すことにより、人間を形成しているという展望を得たことが本論文の成果である。

(博士論文審査結果の要旨)

提出論文は、人間の描画活動において、身体機能の発達と道具使用の経験、さらに文化や社会の影響を受けながら獲得される描画の個人性が、身体に定位していくプロセスとその意味について論じたものである。「描画の発達段階論」と言われる先行研究においては、乳幼児期から青年期までが主な対象とされてきたのに対し、本論文は描画の個人性が青年期に獲得されて以降も生涯に涉って保持されることに着目したことで、描画活動が知覚や手の巧緻性の発達といった身体機能、あるいはコミュニケーション

手段としての社会的機能をもつ以外に、人間形成的機能をもつ点を考察したところに特徴がある。本論文は、次の点で新しい知見をえて、この分野の研究に貢献を果たすものと評価した。

第1は、描画の発達段階論の先行研究を整理したうえで、描画の変化を手の巧緻性の獲得、手と目の協応関係、描画道具の操作による感覚の変容などの観点から論じ、描画活動が身体と密接な関係にあることを明らかにした点である。さらに、なぐり描きからシンボルの産出へ至る発達過程において描線への命名行為が見られることの意味を考察することで、描画が言葉や思考と相互に結びつき、その側面から描画の人間形成的意義を論じた点である。

第2は、描画の個人性が、個人の身体機能によるのみならず、文化や社会の影響を受けた慣習行動によって産出されることをP.ブルデューの「文化資本」あるいは「ハビトゥス」論に依拠して、社会文化的行為として描画を捉え直し、家庭や学校という青年期までの描画機会においてどのような文化資本が獲得されるのかという考察を行った点である。青年期以降においても継続される趣味的描画機会として、カルチャーセンターとコミックマーケットを取り上げ、それぞれのコミュニティに特有の志向性を検討することで、そこに参加していく人々のハビトゥスを見出している。この検討を通じて、青年期以降の描画活動には社会的アイデンティティの獲得とそれによる自己形成の意味が含まれることを明らかにした点は独創的である。

第3は、申請者村上紀子が行った青年期及び老年期の被験者200人による描画実験の結果をもとに、描画の個人性を具体的に論証し、それぞれ日常的に描画を行うグループと行わないグループに分け、グループごとに一定の描画傾向が見られつつも、一人ひとりの描画には色合いや大きさ、あるいはモチーフの意味づけなどにおいて個人性が見られることを明らかにした点である。そうした描画の個人性は、それ以前の経験においてすでにもっているイメージや感覚、あるいは発達の過程で備わった身体的リズム、さらには道具の使用の繰り返しによって獲得された身体的所作などが表象された結果であることを理論的に考察しているところも新しい成果である。

本論文は3回の審査の過程で各審査委員から出された指摘を適切に取り入れながら作成された。最終の審査会に先だって開催された論文公開発表会では、学外の専門家も参加し、それぞれの質問に対する申請者の応答も満足すべきものであった。以上の点から、審査会において本論文は課程博士論文として優れたものであると認め全員一致で合格と判定した。

(作品審査結果の要旨)

村上紀子の博士課程修了作品は、今回、支持体から表現の可能性を見直す、という意図のもとにパネルの吟味から始め、そこに貼られる麻布・綿布の選定を経て、さらにその上に数度にわたり下地塗料を塗布し、乾燥を経て注意深く研磨を重ね、陶器のような肌合いを追求するという非常に繊細な作業を行い、表面の描画行為に備えた。その塗布する道具についてもいくつもの種類を試行錯誤し、最適なものを選ぶという慎重な経過を経た。

その上の描画については、シルクスクリーン、という技法を選択して制作されている。作者の思考としては、古来カモフラージュパターンなどに見られる、不定形であり、なおかつ不定形という「定型」デザインのなかにみられる形としての面白さを図像として着目し、表現の根幹とした。カモフラージュパターンのイメージを重ね合わせてモチーフとしたところに作品の特徴が見いだせる。

作品の視覚的イメージの中に出来るだけ観客の予断を持たせぬために、注意深くドットパターンの形それぞれを吟味することはもとより、完成した時の画面上から出来るだけ「手垢」ともいべき制作の痕跡を消すために基盤となるパネルの表面仕上げには相当の努力を払った。その点においても、自己制御ともいべき画面上のクオリティを上げていくための努力がおおいに認められた。作品全体の完成度とともに、博士の作品として相応であると判断され、合格とした。

(総合審査結果の要旨)

村上紀子は、学部時代は日本画、大学院修士課程では図学を学び、その後工学系の大学に就職して工学的な手法での描画研究を続けてきた。本学大学院博士課程に入学後は、引き続き絵画制作を行うとともに、描画実験のデータを集めて博士論文へと展開させた。

提出された論文は、描画の個人性が獲得される機制を、手と目の協応という身体の発達過程や、社会・文化的慣習行動の影響、身体的リズムなどとの関係から明らかにしている。特に青年期以降、老年期にわたる描画活動に着目して、その人間形成的意義を見出したことは独創的な視点として評価できる。

博士学位審査展に展示された作品は、博士課程3年間で様々な技法を実験的に研究するなかで到達した、自らの身体感覚に即する、いわば「皮膚のような」描画形態としてカモフラージュパターンをシルクスクリーンによって制作したものである。シルクスクリーンの版をつくるにあたって多数のドローイングを描くことにおいて、自らの描画の個人性が明確化されるという形で、本作品は提出された論文とも底流のところで結びついている。

実技制作と理論研究とを往還しながら思考を深め、制作コンセプトと技法の研究、先行研究をふまえた広範な資料分析、実践的な描画実験など、幅広い観点から自らの問題意識を作品化・理論化したことは研究能力の優秀さを示しており、今後の活躍が大いに期待されるものである。

総合審査結果として、提出された論文と作品はそれぞれ課程博士学位に相応しい水準に達していることが認められ、最終試験の結果も含めて合格と判定した。